

東国文化自由研究レポート



研究テーマ
群馬県の埴輪作りには、
どのような工夫や特徴が
あるのだろうか。

提出日 2025 年 8 月 25 日 (月)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1 年 | 組 10 番

氏名 齋藤 弥都

1. きっかけ

私は学校で、埴輪の動画を見ました。その時に出てきた埴輪はどれもきれいで、約1500年前に作られた埴輪がどうして残っているのか疑問に思いました。また、埴輪の本を借りてきて読んでいたら、「群馬県には埴輪づくりのプロ集団がいたと考えられています」とあり、埴輪はどのように作られていたか、群馬県では埴輪を作るときにどのような工夫がされていたかなどの疑問が湧いてきました。そこで、埴輪の作り方を詳しく調べてみたいと思いました。



2. 疑問と予想

- (1)なぜ埴輪づくりのプロ集団が群馬県に生まれたのでしょうか。予想は、群馬県には古墳時代に大きなクニがあり、たくさん古墳も作っていたと考えられるので、その中でより良い埴輪を作るために、プロ集団が生まれていったのではないかと思います。
- (2)なぜ古墳時代から約1500年も経っているのに、埴輪は今でも残っているのでしょうか。予想は、素材が丈夫だということと、作るときにも埴輪を丈夫にするような工夫があるのではないかと思います。
- (3)群馬県の埴輪づくりには、どのような特徴があったのでしょうか。予想は、群馬県ではヤマト王権と違う独自の工夫、作り方の文化があったのではないかと思います。

3. 調査方法

- ① 図書館で借りた本やインターネットで、群馬県の埴輪を作っていた集団について調べる。
- ② 高崎市にあるかみつけの里博物館(写真1ー①)と保渡田八幡塚古墳(写真1ー②)へ行き、埴輪の作り方や工夫を調べる。
- ③ 本やインターネットでもさらに詳しく調べ、付け加える。



写真1ー①



写真1ー②

4. 調査

(1)なぜ埴輪づくりのプロ集団が群馬県に生まれたか

古墳時代、群馬県には有力な豪族が各地に存在しました。その繁栄のもととなったのは、自然環境の豊かさです。群馬県には川が多く、農業にとって最も大切な肥沃な土壌が供給されました。また、ヤマト王権との強い結びつきもあり、ヤマト王権の東国の拠点としても栄えました。

このような理由から、群馬県は**東国文化の中心**として栄えました。

このような背景から、群馬県では古墳が多く作られました。全長210mで、東日本1位を誇る太田天神山古墳(写真2)など、大きなものもあります。

かみつけの里博物館へ行った際に、保渡田八幡塚古墳にも立ち寄りました。全長は96mと天神山古墳の半分以上ですが、それでも全部を見て回るのは少し大変でした。天神山古墳の大きさを実感できます。

古墳を作るのに合わせて、豪族たちは独自のルールに基づき多くの埴輪を並べていきました。その中で、大量の埴輪を作る埴輪づくりのプロ集団が群馬県に生まれていきました。



写真2

群馬県内の藤岡市と太田市には、埴輪づくりの大きな拠点がありました。そのうち藤岡市の拠点は、八幡塚古墳で初めてそこで作られた埴輪が使われたことから、八幡塚古墳の築造をきっかけに生まれたと考えられています。私も行った八幡塚古墳がきっかけになって埴輪が発展したとわかり、驚きました。

群馬県の埴輪は質が良く、国宝、国指定重要文化祭に登録されている埴輪の約4割は群馬県から出土した埴輪です。また、埴輪の数も多く、2000基以上の古墳に埴輪が並べられています。比較的小さい古墳にも埴輪を並べているのが特徴です。下のような国宝に指定されている埴輪があります(写真3、写真4)。

写真3→

初めて国宝になった埴輪
「挂甲の武人」
細部まで丁寧に表現され、美術的にも評価の高い埴輪です。6世紀後半に作られました。



写真4→

これも国宝の埴輪です。
(群馬県高崎市出土)



(2)なぜ埴輪は今でも残っているか

①埴輪の素材、作り方

埴輪の素材は、主に粘土です。1つ目の工程では、焼き物用の粘土を作ります。粘土に水と砂を混ぜ、よく練ります。空気を抜いて、1年以上寝かせます。寝かせると粘りが出て、形を作りやすくなります。

2つ目の工程では、成型をします。埴輪は、粘土を輪のように積み上げて作ります。この方法を「輪積み」といい、粘土を板のようにして作るより強度が増します。基本的には円筒埴輪も形象埴輪も同じ作り方です。

<円筒埴輪の成型>

写真5のような手順で成形します。



写真5

また、埴輪には土台がついていて、それを使って埴輪を古墳に固定していました。

輪の形ができたなら、3つ目の工程で1ヶ月ほど、陰干しで乾燥させます。これにより、焼いた際に水分が膨張して、ヒビが入ったり、割れたりしないようにします。

4つ目の工程では、埴輪を焼きます。5世紀前半までは薪の上に埴輪を並べて、小枝やワラ、粘土で覆って蒸し焼きにする、覆い野焼きという方法で焼いていました。それより後には、窯(写真6)を使って高温(1000℃以上)で一気に焼きあげるようになりました。



写真6

この作り方では、輪積みにして強度を増させたり、1ヶ月ほど乾燥させるなど、今でも埴輪が残っている理由の一つになりそうなものもあります。しかし、基本的にはお茶碗と同じ作り方なので、壊れやすいと考えられます。

実際に、かみつけの里博物館で、埴輪の経年劣化を観察しているコーナーがあったので見てみました。すると、多くは数年で割れてしまい、長くても15年ほどしかもたないことがわかりました(写真7)。古墳時代にも、ある程度の期間、維持管理は行われていたようですが、それでも長くはもたないでしょう。したがって、上のような埴輪を作る際の工夫だけによって埴輪が今でも残っているとはいえないでしょう。

では、なぜ埴輪は、今でも残っているのでしょうか。



写真7

②榛名山の噴火

埴輪が残っている理由の一つに上毛三山の一つ、榛名山の噴火があります。6世紀の中頃、榛名山では二回大きな噴火が起きました。噴火で起きた洪水によって、埴輪は散らばることなく埋まりました。埴輪がたくさん出てきたのには、こうした理由もあります。実際に、保渡田八幡塚古墳でも、埴輪が固まって出てきて、埴輪が並んでいた様子を復元しています(写真8)。群馬県の埴輪は、噴火に守られたのです。



写真8→

【保渡田八幡塚古墳全景(南東から)】

③埴輪の修復

前に書いたとおり、群馬県には埴輪が残っている理由がありますが、それでも埴輪の大半は破損した状態で見つかります(写真9)。風雨にさらされたり、冬場には凍結することもあるからです。そんなときは、研究者や修復の業者ができるだけ元の状態になるように修復します。細かな破片を、パズルのように組み上げて、接着していきます。この作業は、パーツが抜けているものも多く、とても多くの時間と労力を費やします。抜けている部分は、樹脂や石膏などで補修し、細かい部分も学術的な検討を経て復元します。埴輪本体部分と復元箇所を区別できるよう塗装したら、修復は完了です。このようにして、私たちの目に埴輪がふれるようになるのです。



写真9

(3)群馬県の埴輪の特徴

ここでは、西日本の埴輪と比べたときの群馬県の埴輪の特徴を考えます。

(写真10)を見ると、群馬県と西日本では、見た目に差が見られます。群馬県の巫女の埴輪は、衣装全体に幾何学模様があしらわれ、大きなアクセサリーをつけているなど、全体的に派手な印象です。古墳時代のメイクも表現されていて、当時は色があせていなくて、もっと派手だったと考えられます。

一方、西日本の巫女の埴輪は、群馬県と比べてシンプルです。イヤリングなどの装飾品も少なく、ネックレスも簡素なものになっていて、服もシンプルな祭服です。



写真10

また、(写真11)の椅子に座る王も群馬県と西日本では違います。群馬県の埴輪は、立派な冠や、左手に握った和風太刀から、王の威厳が感じられます。首飾りや全身の水玉模様など、細部の装飾もおしゃれで、作り込まれています。

一方で、西日本の王の埴輪は多くが冠をかぶっていません。さらにこの埴輪は装飾品もつけず、服装もシンプルです。しかし背筋を伸ばして座るたたずまいに、王の威厳を感じます。



写真11

これらの2つの例を総合して考えると、関東の埴輪は「派手で細部の装飾まで凝った埴輪」、西日本の埴輪は「シンプルだが洗練された埴輪」というように考えられます。

このように、群馬県を始めとする東国では、ヤマト王権に影響されながらも、それを模倣するだけにとられず、地域色のあるバラエティー豊かな埴輪が作られました。西日本では6世紀に入ると、前方後円墳は消滅し、それに合わせて埴輪も衰退していきました。しかし、群馬県では埴輪ブームは終わらず、埴輪づくりも発展していきました。群馬県では盛んに飼育されていた馬の埴輪が350例以上と、盛んに作られ、人が乗る馬型埴輪(写真12)など個性があるものも作られました。



写真12

5. まとめと考察

(1)～(3)の調査についてまとめ、考察します。

(1)群馬県はヤマト王権との結び付きが強く、発展していきました。そのため、大きな古墳がさかんに作られ、それに合わせ埴輪の需要が高まりました。そして、埴輪を効率的に生産するために、埴輪づくりのプロ集団が藤岡市と太田市に生まれました。群馬県の埴輪は、こうした埴輪づくりの拠点が競い合って発展していったのだと考えられます。そのような産業は、今もあると思います。例えば、自動車産業も各地の会社が切磋琢磨してより良い車を作り上げようと努力しています。埴輪は、古墳時代に自動車産業のような役割をしてクニを支えた産業だったのだと思います。実際に、中二子古墳(前橋市)では、藤岡産「ブランド」の埴輪を精巧さが求められる形象埴輪にだけ使っています。また、国宝の「挂甲の武人」は、太田市から出土しています。このことから、太田市の工房でもこのような品質の良い埴輪が作られたと考えられます。つまり、多くの豪族に自分たちの埴輪を使ってもらうために、細部まで精巧に作られた埴輪が多いと考えます。

(2)私は、この疑問に対して埴輪の材質や作り方に工夫があるからだと予想しました。その予想は、半分あっていて半分間違っていると言えらると思います。実際に、「輪積み」でただ壁のようにするより強度を増させる、しっかり1ヶ月ほど乾燥させて焼いたときに割れないようにするという工夫はありました。しかし、それだけが理由で埴輪が約1500年も残っているわけではありません。まず、2度の榛名山の大噴火で埴輪は地中奥深くにまともって埋まり、雨風で侵食されるのを防ぎました。それでも壊れてしまった埴輪は研究者たちが時間と労力を費やして復元しています。さらに、榛名山の噴火は埴輪の修復の上でも埴輪のパーツがないということが少なく、行いやすいと思います。群馬県の埴輪は、先人の工夫と運、研究者の努力によって今もその姿を見ることができるのです。今も残っている埴輪はまさに「奇跡の逸品」と言えらると思います。

(3)群馬県と西日本の埴輪は、その見た目に大きな差があります。上で挙げた例に共通して言えることは群馬県の埴輪は「派手で細部の装飾まで凝った埴輪」、西日本の埴輪は「シンプルで洗練された埴輪」だということだと思ひます。西日本から古墳や埴輪の文化は始まり、東日本や群馬県には後から伝わってききました。西日本ではヤマト王権の影響が強く、みんな似たようなものになることもあると思ひます。また、近畿地方では天皇中心の国づくりが早くから進んだため、埴輪づくりがあまり発展しないまま衰退してしまいました。一方、東日本では、独立した豪族が多くいて、埴輪ブームも長く続きました。そのため、各地域で違う埴輪ができて、個性のある埴輪が西日本と比べてたくさん生まれました。また、埴輪を作る目的にも差があったと考えられます。西日本では、ヤマト王権はすでに大きな権力を持っていて、大きな古墳を群馬県よりもたくさん作っていました。そのため、とにかくシンプルにしてたくさん作らないと間に合わなかったのかもしれない。一方、東日本では西日本よりは大きな勢力はなかったため、作られる古墳もそこまで大きくはなく、忙しさも少しはマシだと思ひます。だから、たくさん作るかわりに細部の装飾まで凝った豪華な埴輪を作り、王の権威を表すようになったのだと思ひます。

6. 研究の感想

私は今回の研究で、埴輪の作り方や工夫について考えていきました。このレポートを書く前は、古代の歴史はあまり興味がなく、なんとなくよくわからないと感じていました。しかし、かみつけの里博物館へ行ったときに埴輪に触ることができ、その手作り感満載の見た目やさわり心地が魅力的に感じました。そして、その後のレポート作成を意欲的に進めることができました。

調べていく中で、古墳時代の人でも今の人もあまり変わっていないなという感想をもちました。昔の人は大きな古墳や美しい埴輪で自分の財力を示していました。そして、今の人は大豪邸を建てたり高級車を買ったりして財力をアピールしているように思えます。結局やっていることは一緒で、古墳時代に親近感がもてました。

今後は、実際に埴輪を作って難しさなどを体感したいです。

7. 参考文献

<文献・資料>

- ・かみゆ歴史編集部『楽しく学べるはにわ図鑑』、朝日新聞出版、2024
- ・河野正訓、山本亮『はにわのヒミツ』、新泉社、2024
- ・群馬県立歴史博物館編『集まれ!群馬のはにわたち』、群馬県立歴史博物館、2019

<webサイト>

- ・松島榮久『東国文化副読本』、群馬県歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会
<https://hani-gunma.jp/2021gunmatougoku/book/index.html#page=76>
8月6日閲覧
- ・群馬県ホームページ『歴史を語る「ぐんまの埴輪（はにわ）」』
<https://www.pref.gunma.jp/site/gunmakouhou/15533.html#:~:text=>
8月5日閲覧
- ・群馬県ホームページ『もっと埴輪（はにわ）や古墳について学んでみよう!』
<https://www.pref.gunma.jp/page/3827.html#:~:text=>
8月5日閲覧